

学部改組による学生の変容（２）

鳥取大学地域学部及び教育地域科学部学生の連続意識調査に基づいて

大谷 直史 ，高口 明久

Changes of the Student by Faculty Reorganization (2)

OOTANI Tadasi , TAKAGUCHI Akihisa

キーワード：学部改革，大学生，生活意識

１．はじめに

学生は何を考え、どのような大学生活を送っているのかを明らかにすることが本論の課題である。それは大学が学生に対して結果的に供給しているものを明らかにする作業でもある。というのも、大学は学生に学問だけを供給しているだけではない。課外活動はもちろんのこと一人暮らしやアルバイト、恋愛、ボランティア、そして何もしないでよい時間を含めて、意図的ではないにせよ供給している。アパシーやモラトリアムと呼ばれながらも、多くの時間を自由に処分することができることは学生時代の特権と思われる。しかもそれなりの社会的評価を得ながら、「学生さんだから」という留保つきでふるまうことができる。学生もまた、学生であることを利用して、アルバイトやボランティアを行うことができる。社会的にあまり評価されない状態であったとしても、そこには常に学生であるという立場が確保されているのである。アルバイトやダブル・スクール、恋愛にサークル、消費生活からひきこもりに至まで、学生であることがある活動に勤しんでいるという前提を語ることはできないのである。

そのように大学が供給するものを明らかにしたとして、そしてそのいずれかに学生が満足し、充実感を

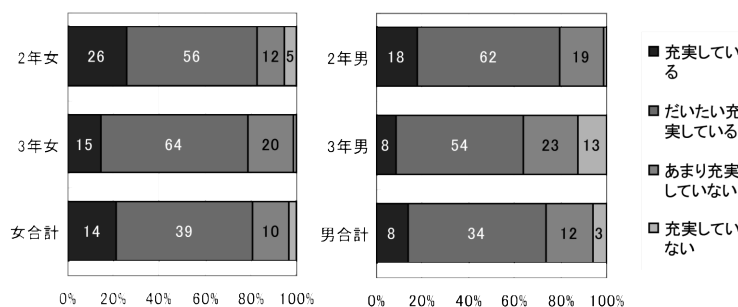


図１ 生活充実度

ているとして、それが評価に値するかどうかは別の問題である。顧客(学生)が満足すればよいということではないし、学業に満足しているからといってもその満足の内容は分からない。実際に何が供給され、それに対して学生がどう評価しているのか。さらにその評価が妥当なのかどうかをも検討せざるを得ない。本調査では学生の評価を通して分析を進めるが、本章はその評価を行う学生の実態をどう捉えればよいのかについて仮説を提示する。本論は、調査途中の最初の中間報告として、仮説を提出するという役割も負っている。第1節で調査の主要な項目を述べた後、第2節で意識構造、第3節でまとめと課題を述べる。なおグラフ中の数字は各割合を示している。

2. 学生は何をしているのか

1) 生活充実度

本節では、学生の生活と意識全般について、主に学年・性別で検討する。通常の場合、学年による区分は在籍年数が増えることによる効果が主に現われると考えられるが、本調査においては学部改組の影響から、そういった想定はできない。学年進行にかかわる分析は、次回以降の課題とする。まず「あなたの学生生活は充実していますか」との問いに対する回答結果が図1である。女性では約8割、男性では約7割が「充実している」あるいは「だいたい充実している」と肯定的な回答をしている。学年別では、2年生が3年生よりも充実していると答える傾向にあり、とりわけ男性3年生に否定的な回答(約4割)が多い。

さてこの学生生活の充実が何によってもたらされているのかを検討するのが本章の課題であるのだが、先に授業の満足度との関連、授業への出席率との関連を確認しておく。

授業に満足しているほど生活が充実していると回答する、あるいは生活が充実していると授業に満足していると回答する傾向があることがわかる(図2)。また授業に出席しているほど生活が充実していると回答する割合が高い(図3)。特に出席率が7割に満たない(6割まで)と答えている者(11名)は、生活充実度が低い。このことは、授業に出席しなくとも、他の大学生活(サークルや恋愛等)で充実しているという学生像は想定しにくいことを示唆している。

2) 生活の様子

このような大学生生活の充実(非充実)をもたらす要因となっている、学生の日常生活の様子を確認する。図4はそれぞれの施設等の利用率を性別・学年別に表わしたものである。左から全体の利

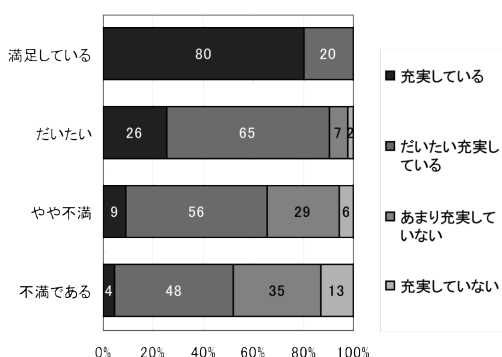


図2 授業満足度と生活充実度

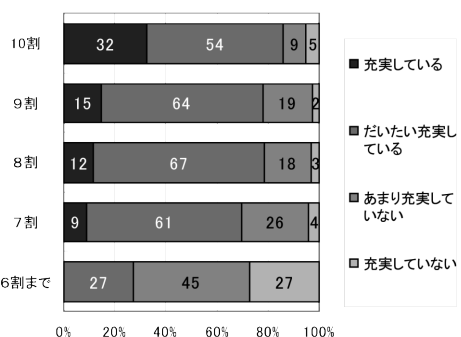


図3 授業出席率と生活充実度

利用率の高い順に並べ替えている。基本的には在学年数の長い3年生の利用率が高い。唯一カラオケが学年に関係なく、ほとんどの学生が利用している施設である。また海水浴場とスキー場、パチンコ店を除き総じて女性の利用率が高い。これらの施設の中で、男女間で有意な関係が見られたのは、女性が多い項目として映画館（ $P=0.010$ ）、舞台・コンサート（ $P=0.012$ ）、男性が多い項目としてパチンコ店（ $P=0.000$ ）のみである。これらの利用率は、当該施設の立地条件や利用条件、学生の持つ交通手段にも大きく依存していることが考えられる（たとえば、スキー場・動物園・遊園地は車の有無によってアクセスのしやすさがかなり異なる）。

また図5は、自由時間の使い方を聞いたものである（複数回答）。男女総計の多い順に左から並べ替えている。最も多いのがテレビ、音楽・マンガ・本と続き、5番目にインターネット（ネット）が登場する。学年が高くなるにつれ選択率が上がる傾向があり、パソコン（PC）・スポーツ・ゲームを除いて、女性の選択率が高い。男女間で有意な差が見られたのは、本（ $P=0.038$ ）、雑誌（ $P=0.000$ ）、散策（ $P=0.044$ ）、ゲーム（ $P=0.000$ ）、スポーツ（ $P=0.000$ ）である。活字メディアに対する女性の親和性が見られるが、総体として、その内容はともかく、メディアに関する男女差は少ないと言える。

また図5は、自由時間の

ある（複数回答）。男女総計の多い順に左から並べ替えている。最も多いのがテレビ、音楽・マンガ・本と続き、5番目にインターネット（ネット）が登場する。学年が高くなるにつれ選択率が上がる傾向があり、パソコン（PC）・スポーツ・ゲームを除いて、女性の選択率が高い。男女間で有意な差が見られたのは、本（ $P=0.038$ ）、雑誌（ $P=0.000$ ）、散策（ $P=0.044$ ）、ゲーム（ $P=0.000$ ）、スポーツ（ $P=0.000$ ）である。活字メディアに対する女性の親和性が見られるが、総体として、その内容はともかく、メディアに関する男女差は少ないと言える。

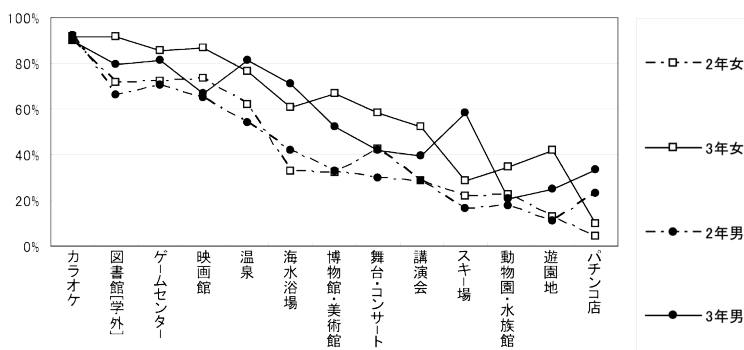


図4 大学入学後、利用したことのある施設等

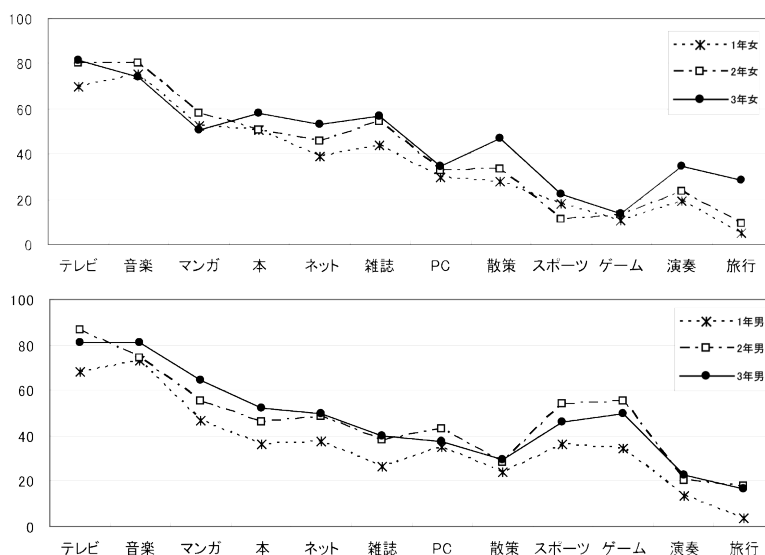


図5 自由時間に何をしていますか

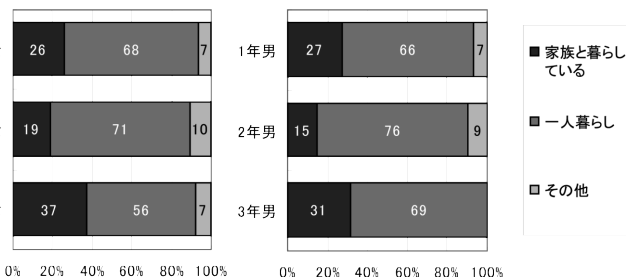


図6 家族との同居の有無

3) 家族

次に家族とのかかわりである。家族のもとから通学している学生（自宅生）は全体で25%であり，地域学部改組された年の入学生の割合が少なくなっている（図6）。その他は主に学寮である。

このうち自宅外生について，家族と連絡をとる頻度を聞いたのが図7である。女性の方が家族と連絡をとる頻度が高いが，学年の差ははっきりとしない。少ないとは言え，男性でも週に1度以上連絡をとる者が4割近くいる。携帯電話の普及により，家族と連絡をとる頻度が高くなったという指摘もある。今回の調査では聞いていないが，携帯電話かメールかということも含めて，その手段を問うことが必要である。

図8は，帰省の時期を聞いたものである（複数回答）。夏休みと冬休みは，性別・学年にかかわらず，ほとんどが帰省している。学年による差が大きいのはゴールデンウィークである。2年生は1年生の時の帰省についての回答であるので，入学1ヵ月後の帰省となる。ここで7～8割が帰省している。3年生ではこれが4割前後と大幅に減少している。

4) 友だち・恋人

図9は，「あなたに友人はいますか」と聞いた結果である。女性の方が友だちを多く答える傾向がある。これは東京神戸調査でも同様の傾向を示している¹。また図10は，「あなたには「親友」と呼べるような人はいますか」と聞いた結果である。ほとんどの学

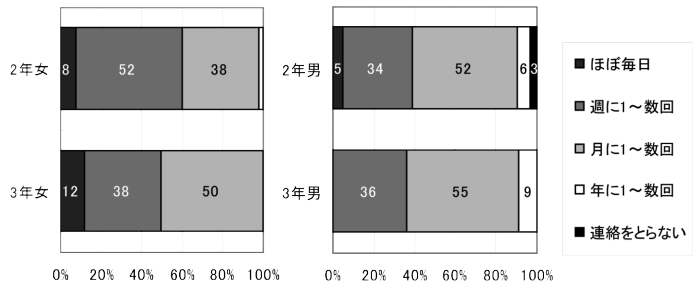


図7 家族と連絡をとる頻度（家族と別居の者のみ）

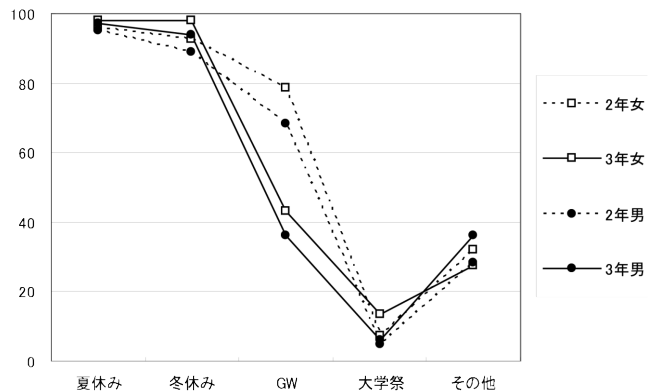


図8 実家への帰省（家族との別居の者のみ）

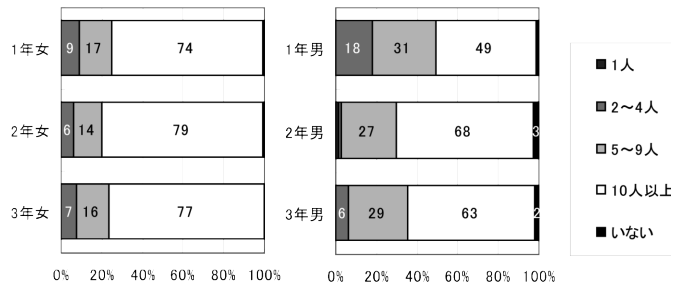


図9 友だちの人数

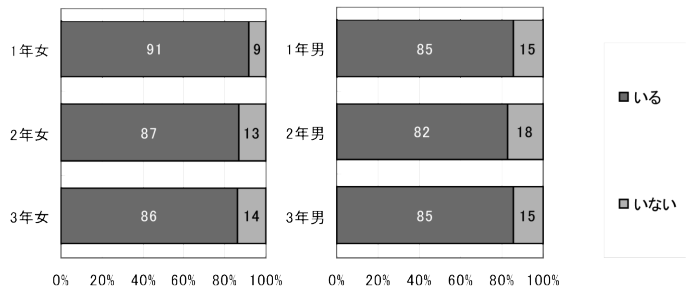


図10 親友の有無

生が「親友」を持っていると考えてよい。ここでも若干女性の方が「いる」と答える傾向があるが有意な差ではない。

図11は、恋人の有無である。1年生の男女差はないが、学年が進むにつれ女性の恋人保有率が高くなっていく。

続いて、図12が課外活動への参加状況（1年生は参加の予定）、図13がアルバイトの状況、図14がボランティア活動の状況である。性別では課外活動にのみ有意差がある（ $P=0.039$ ）。

課外活動では2年生男子の活動割合が高い。またアルバイトは3年生女子の6割が「常時している」と答え、実施率が高い。ボランティア活動は、2年生男子と3年生女子の参加率が高い。しかしこれまでの結果からは、各性別学年に一貫した傾向は見出しがたい。

図15は、「大学入学後、あなたを大きく変える出来事」があったかどうかを聞いたものである。性別の有意性はないが、女性（特に3年生）のほうが男性よりも「あった」と答える割合が高い。ではその内容はというと、図16の通り、サークルと友だちが1/3ずつを占め、続いて恋人(11%)、アルバイト(8%)、ボランティア(3%)となっている。3年からは、少人数のゼミや教育実習、就職活動、卒業論文など、学生にとっても重要な活動が始まる。それらの活動がどのような役割を果たすのか（あるいは果たさないのか）、興味深い。

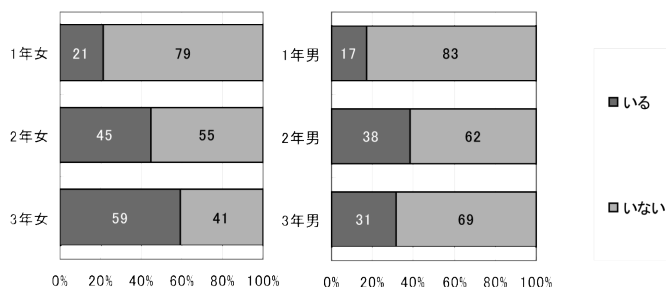


図11 恋人の有無

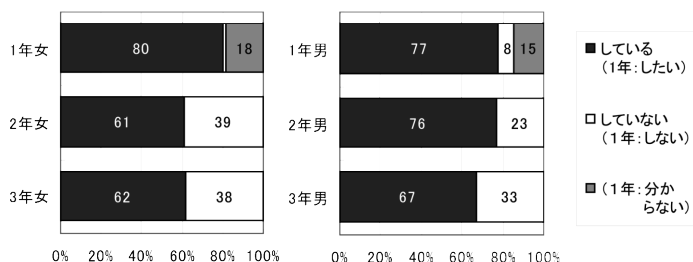


図12 課外活動（サークル活動）への参加

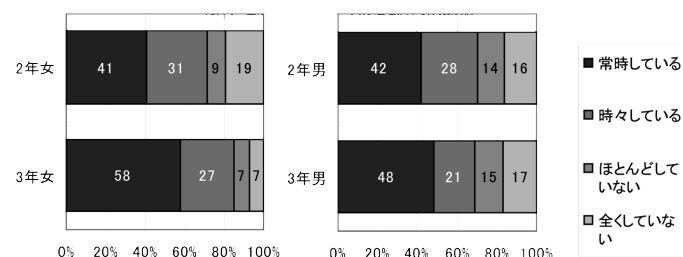


図13 アルバイトの状況

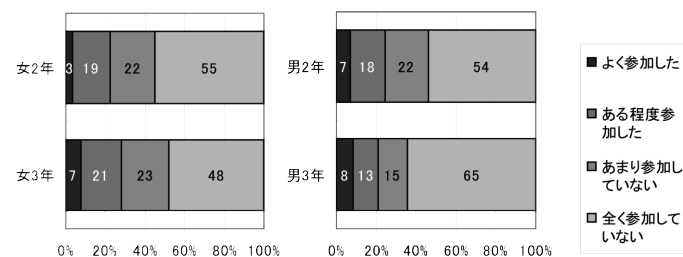


図14 ボランティア活動・NPO活動への参加

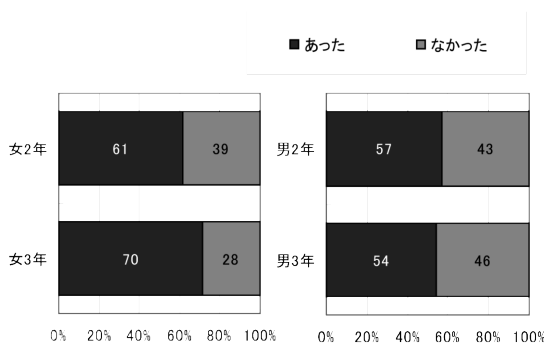


図15 あなたを大きく変える出来事

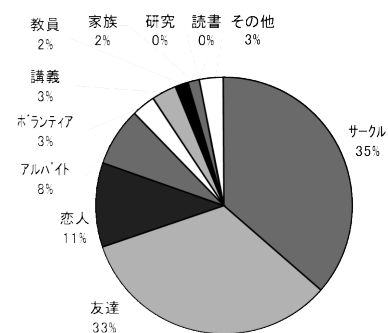


図16 あなたを大きく変えた出来事

3. どのような学生がいるのか

1) 意欲のあり方

わたしたち教員は、学生を類型化して日々のかかわりを取り続けている。たとえば、座席を特定していない講義において、前に座るのが真面目で学問に動機付けられた学生であり、後ろにグループ化するのが不真面目でとりあえず教室に来ている学生であるといった具合である。そのとき、前に座っている学生の点数が悪いと何かあったのかと心配するかもしれない。また後ろではしゃいでいる学生の点数が良いと、要領がよいと感じるか何か不正があったのではないかといぶかしがることもあるかもしれない。しかしこのような類型化は現在でも、そして大学という場で有効なのだろうか。むしろできる学生は、学業もアルバイトもサークルも恋愛もでき、できない学生はとことんできないという感触もある。その感触は一部の目立った事例なのかもしれない。

ゼミなどで学生と接すると、かなり親密な関係にもなる。勉強はあまりできないがコミュニケーション能力があれば、まあこの学生は大丈夫だろうと思ひ、逆のケースだと心配になる。学生がど

表1 今やりたいこと

(%)

	そう思う	まあ そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	そう 思わない	一番大切	一番幸せ
学問・研究をする	47	37	7	7	2	32	3
将来に役立つ資格をとる	67	24	6	2	1	29	1
クラブ・サークル活動をする	39	30	14	8	9	4	8
のんびりする	30	35	21	10	4	3	16
友人とふれあう	58	33	6	2	1	14	28
恋愛をする	29	41	19	6	5	2	13
ボランティア活動をする	12	37	31	14	6	1	0
アルバイトをする	36	41	15	6	2	1	1
車や洋服など消費生活を楽しむ	17	34	20	19	11	0	3
趣味を楽しむ	46	36	14	3	1	3	19
留学する	11	15	26	19	29	2	0
いろいろな所に旅をする	33	30	18	13	6	3	5
何でもほどほどにやっていく	13	31	29	16	11	4	1
なんとなく日々が過ぎていけばよい	2	5	15	26	52	1	0
合計	-	-	-	-	-	100	100

のような世界を生きており，その中で学問がどのような位置を占めているのか。それが分からないと，効果的な指導もままならないだろう。ここでは，「今，したいこと」を尋ねた設問を用いて学生類型化し，それぞれの学生がどのような世界を生活しているのかを仮説的に提示したい。

表１は，「今，以下の事柄をどの程度したいと思いますか」という設問を５件法で聞いた回答をまとめたものである。さらに「一番大切」なこと「一番幸せ」なことの回答割合を右の欄に掲載している。これを見ると，一番大切なことは「学問・研究をする」（以下，「学問」）が32％と最も高い割合を示しているが，それとほぼ並んで「将来に役立つ資格をとる」（以下，「資格」）が29％となっている。５件法で聞いた設問では，「資格」に対して2/3の者が「そう思う」と回答し，一番支持が高い。教員を目指すものにとって

は，資格をとることが大学進学目的になっており，学問が一番強い動機とはなっていない。ただし，資格が教員免許だけを指しているのではなく，大卒という資格を指していることも考えられる。一方でこれらの「学問」「資格」が「一番幸せ」と答えるものは，それぞれ3％・1％とごく少数である。回答は分かれるが，「友人とふれあう」（以下，「友人」）が28％と最も高く，以下「趣味を楽しむ」（19％），「のんびりする」（16％），「恋愛をする」（13％），「クラブ・サークル活動をする」（8％）と続く。

この「一番大切」「一番幸せ」なことは，性別学年によって，回答の傾向が異なる。図17は，「一番大切」なことの選択割合を示したものであるが，１年生では「学問」が多い。調査時期が入学直後であり，規範的に

回答する傾向もあると考えられる。また「一番幸せ」なことでは，１年では男女いずれとも最多の「友人」が，学年進行とともに減少し，その他の項目と順位が入れかわっている。女性では，「恋愛」が学年が上がるとともに増加し，男性でも「恋愛」が増加している。また男性では「趣味」が一貫して高く，女性では「のんびり」が高い。

もっともこれらの学年差が，学年進行による効果なのかは，今後の調査結果を待たなければならない。

２）学生類型と特徴

この「今，したいこと」の設問を用い，因子分析を行った結果が表２である。３つの因子を抽出し，それぞれ「コミュニケーション志向」「気まま志向」「社会志向」と名づけた。設問の内，「学

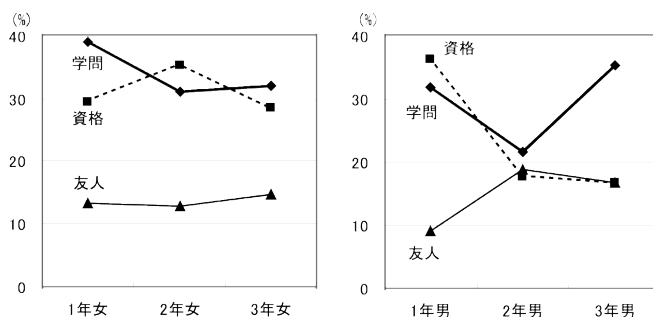


図17 一番大切なこと

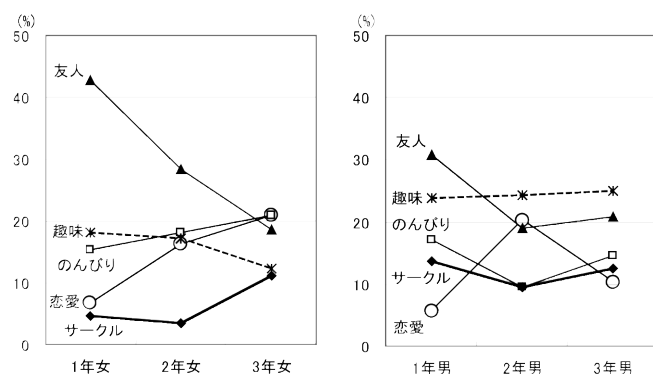


図18 一番幸せなこと

問・研究をする」「資格をとる」「趣味を楽しむ」「アルバイトをする」は、共通因子の割合が少なく除外した。つまり、上記の3つの志向とこの4項目は無関係であり、気ままに生きるという意識を持っていたとしても、それは学問・研究をしない、アルバイトをしないという意識を持つことを意味しない。今回は把握できないが、実態として学業に取り組んでいるか

いないかに関わらず、学問がやりたいという意識を持っている可能性もある。資格もまた同様に、取得しなければいけないものが「やりたい」ものとして表れているのかもしれない。

次にこれらの因子得点をもとに、クラスター分析を行い、4つのクラスターを得た。「タノシミ」(153名)は多くのことに積極的であり、かつ気まま志向も持ち合わせていることから気軽に前向きに生きているクラスターであると言える。逆に「マジメ」(70名)は物事をまじめに考え、対人関係や対社会関係に開かれていない内向きに考えるクラスターである。その中間に「ソコソコ」(168名)クラスターがあり、友だち関係も社会活動もソコソコに行い、遊んでばかりではいけないとまじめに考える。「ウダウダ」(113名)は気まま志向だけが強く、日々をなんとなく過ごしていきたいと考え、仲間関係や社会活動はホドホドにと考えるクラスターである。

男女とも1年生に「ソコソコ」が多く、2年男と3年女に「タノシミ」、2年女と3年男に「マジメ」が多い。「ウダウダ」は概して男性に多い。この性別学年の一貫性のなさは、学科間を比較しても同様であり、学部改組の影響によるものと考えられるが、今後の調査の結果を待ちたい。

溝上慎一は、学生の大学観の調査から5つの類型(自分探しモラトリウム、消極型、モラトリア

表2 因子分析結果(今したいこと)

	1コミュニケーション志向	2気まま志向	3社会志向
友人とふれあう	0.740	-0.024	-0.045
恋愛をする	0.671	0.049	0.022
クラブ・サークル活動をする	0.491	-0.091	-0.008
なんとなく日々が過ぎていけばよい	-0.242	0.674	-0.040
何でもほどほどにやっていく	-0.071	0.627	0.052
のんびりする	0.310	0.503	-0.059
車や洋服など消費生活を楽しむ	0.275	0.372	0.081
留学する	-0.104	-0.032	0.745
いろいろな所に旅をする	0.005	0.163	0.565
ボランティア活動をする	0.223	-0.138	0.438
因子相関行列	1	1.000	
	2	0.151	1.000
	3	0.427	0.152
係数	0.601	0.614	1.000

スクリープロットにより、3因子を抽出。固有値から4項目を除外。因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

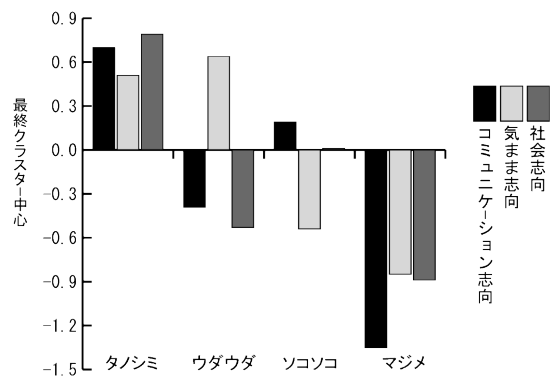


図19 「今、やりたいこと」による学生類型(クラスター分析)

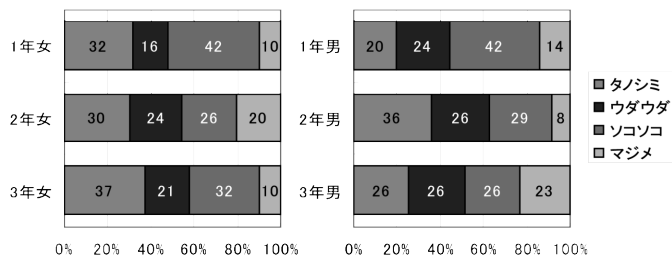


図20 クラスターの性別学年構成

ム型，勉強重視型，積極型）を抽出した²。「タノシミ」が「積極型」，「マジメ」が「勉強重視型」，「ウダウダ」が「モラトリアム型」，「ソコソコ」が「自分探しモラトリアム型」，「消極型」に対比できる。溝上は「自分探しモラトリアム型」の意欲低下を問題視し，自分らしさや自分のやりたいことを追い求める「インサイド・アウト」な生き方の難しさを論じている。

本章では意欲によって分類しているが，それぞれの意欲を持つ学生の生活実態はどうかという視点から，以下主要な項目に関して考察する。その前に各類型がどのような入試方法で入学してきたかを確認する（図21）。AO入試や推薦入試で多いのが「タノシミ」「ソコソコ」である。この入試の性格上，やる気のある学生が受験（合格）しやすいのであろう。

図22は，学生生活の充実度とのクロス集計である（2・3年のみ）。「ソコソコ」が最も充実していると答える傾向にあり，「ウダウダ」が最も充実していないと答える傾向にあることが分かるが，それほど大きな違いであるとは言えない。

しかしその充実の内容は各類型によって異なることが予想される。たとえば図23は，1週間の図書館の利用との関係を示したものである。「ウダウダ」は他のクラスターと比べて圧倒的に利用していないことが分かる。逆に一番利用しているのが「マジメ」クラスターである。「ウダウダ」「ソコソコ」は中程度であり，この結果が即，「マジメ」が勉強をよくしている，勉強によって充実しているとは言えないものの，学生生活の充実の仕方の違いを示唆するものとなっている。

また友だちの数について聞いた設問とのクロス集計が図24である。「タノシミ」「ソコソコ」の「10人以上」という回答が多く，「ウダウダ」「マジメ」は友だちの数を少なく答える傾向がある。そもそもコミュニケーション志向の強いのが「タノシミ」であり，図19を見比べても当然の結果と言える。

4．小括

学生であることが学業によって自己実現を目指す，あるいは学業によって学生生活の満足感・充

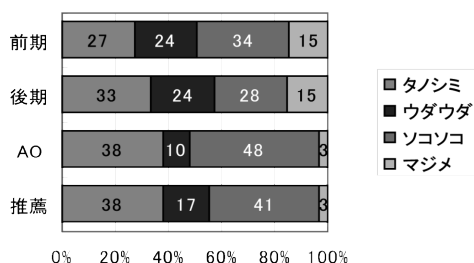


図21 入試方法とクラスター

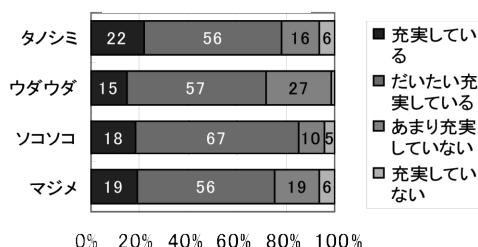


図22 クラスターと生活充実度

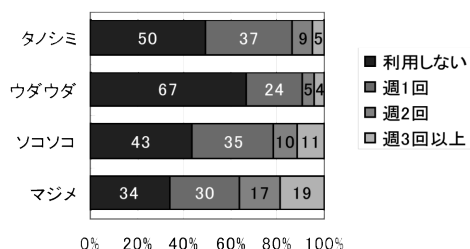


図23 クラスターと図書管理利用

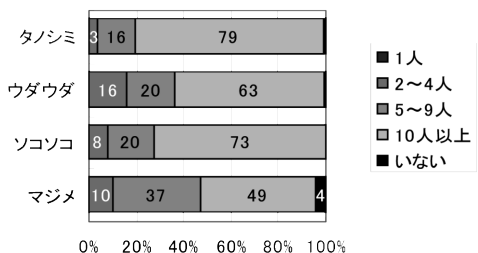


図24 クラスターと友達の人数

実感を得ている（得ようとしている）ことを指しはしない。もちろんそれは「大切なこと」としては意識されており、約 1/3 が「学問・研究をする」ことが「一番大切」と答えている（表 1）。しかし「今やりたいこと」、そして「一番幸せ」なこととなると、前者では資格を取得することや友人とふれあうこと、趣味を楽しむことが「学問・研究をする」とことと拮抗し、後者ではさらに恋人とのかかわりやのんびりすることが重視されることとなる。因子分析の結果、4 つの類型「タノシミ」「ウダウダ」「ソコソコ」「マジメ」が抽出され、それぞれに学生であることの内実が異なることが示された。そしてそれぞれの類型がそれぞれのあり方で学生生活を営み満足感・充実感を得ていることが明らかとなった。

注意しなければならないのは、この 4 類型は何をしたいのか、その種類によって分かれているということではないことである。この 4 類型はむしろあらゆることに対してどのぐらいしたいと思っているかという程度によって区分されると考えた方がよい。「ウダウダ」が消費生活に、「マジメ」が学問にという傾向はあるものの、すべてに積極的な「タノシミ」から、因子分析から除外された、学問・資格・アルバイト・趣味以外には消極的な「マジメ」までの程度による区分である。学生の多様化と言う場合、質の多様化という視点からだけではなく、量の多様化という視点からも考察する必要があるだろう。

これら学生に対して大学は何を提供するべきだろうか。まずは、学問や研究が必要条件ではあるかもしれないが、自分を変える大きな出来事や幸せであることに、それらは直接かかわっていないと意識されている事実を考える必要があるだろう。そして今回抽出された 4 類型に与える意味を考えつつカリキュラム編成を行うとともに、福利厚生を含めた学生への支援を考えていかななくてはならない。また教育学部という前史をもつ本学部（特に地域教育学科）の特徴と考えられる資格重視の傾向について、他学部・他大学の教育学部との比較検討が必要である。

さてこの 4 類型にしても、その他の事項（友だちの数等）にしても、学年間の一貫した傾向は見られなかった。他にはあまり例を見ない教員養成系から一般学部への改組という事態において、受験生がどのような動向を示したのかはここで触れることはできないが、地域学部改組直後の入学者層が大きく変動したことを示唆している。これが学年進行による変化なのか、それとも学部改組による変化なのか、あるいは一時的な混乱を示しているにすぎないのかは、今後の調査によって明らかになるだろう。今後、卒業時までの経年変化を明らかにし、今回の学部改組がもたらした影響を明らかにしたい。

¹ この設問のほかいくつかは高橋勇悦らの青少年研究グループによる調査を参考にしている（高橋勇悦監修『都市青年の意識と行動』恒星社厚生閣、1995年）。本調査では年齢差が少ないためその傾向は見られないが、年齢が高くなるほど友だちの数を少なく答える傾向もある。たとえば東京神戸調査では「10人以上」という回答が、女性では16-19歳で80%、20-24歳で69%、25-30歳で58%、男性では同じく65%、63%、59%となっている。ただしこの調査対象は学生に限られていない。

² 溝上慎一『現代大学生論』日本放送出版協会、2004年。